

# M.O.V.E. DJ MITSU THE BEATS feat. Frank Nitt & Guilty Simpson

90年代ラップホップをテーマに掲げ、DJ MITSU THE BEATSがエグゼクティブ・プロデューサーを務めるレーベル「C.r.e.a.m. Team Records」これ共々、DJ MITSU THE BEATS自身のプロデュースでShing02やKOHEI JAPANをフィーチャーしたシングルをそれぞれリリースしてきたが、第3弾リリースとなる今回は初の海外ゲストとして共にデトロイト出身のFrank Nitt (以下「Frank」) やGuilty Simpson (以下「Guilty」) の二人をゲストに招聘。最強な3人のタッグによる楽曲「M.O.V.E.」が完成した。

ラップホップ・デュオ「Frank N Dank」の活動でも知られるFrankや、片やデトロイト生まれの活動しているGuiltyだが、彼らは単に同じデトロイト出身というだけでなく、伝説的なプロデューサー「J Dilla」と繋がりが深いという共通項があるのは、コナララップホップファンであれば存じださう。彼らと同じデトロイト出身であり、90年代半ばから2000年代にかけて数々のラップホップトラックを生み出しながら、2006年に32歳で若死していったJ Dilla。Frank

がJ Dillaに初めて出会ったのがFrank自身がまだ12歳の時(注：J DillaはFrank Nittiの11年上)で、Frank N Dankがラップ各の名付け親もJ Dillaだったと云う。

Jay Deeが中心で活動しながら、すでにプロデューサーとしてラップホップファンの間では知られる存在であった彼が、2001年に自身の名義(＝Jay Dee aka J Dilla)リリースした初のアルバム『Welcome 2 Detroit』の収録曲「Pause」にFrank N Dankはゲスト参加している。ちなみに2003年にリリースされたJ DillaとLAのプロデューサー「Madlib」のデュオによるJaylibのアルバム『Champion Sound』のメイントラックの1つであった「McNasty Fitch」ではFrank N Dankはフィーチャーされている。

DJ MITSU THE BEATS: Frankを知ったのは、やはりJ Dilla『Welcome 2 Detroit』だと思ってます。ちなみに、Jaylibの「McNasty Fitch」のラップが個人的に、本当に印象深いですね。ちなみにFrank N Dankの曲は今もまだ一番プレイしたのが「Push」なんです。12インチシングルがヨーロッパ(ドイツ)リリースで、日本では入手困難だったので個人輸入で手に入れて。J Dillaがプロデューサーしているんですけど、このビートにも個人的影響を受けて。今でもプレイし続けている僕にとっては重要な曲ですね。

Frank N Dank: 同様に、GuiltyやJaylib

『Champion Sound』にフィーチャリングされており、参加曲「Strapped」は彼のラッパーとしてのキャリアの中でも最初期の作品の1つだ。その後、GuiltyやJ Dillaが亡くなった以降にリリースされたアルバム『The Shining』や「Ruff Draft」にも参加するまで、デトロイトの注目ラッパーとしてその名を広めていき、2008年にはじめて1stアルバム「Ode To The Ghetto」をStones Throwからリリース。当然、このアルバムにもJ Dillaのプロデュース曲(「I Must Love You」)が収録されている。

DJ MITSU THE BEATS: Guiltyが最初にJ Dilla関連のアーティストを知った。Guiltyのアルバムも格好良かったんですけど、僕が一番好きなGuiltyの曲がM.E.D.と一緒にゲスト参加していたQuakersの「Fitta Happier」(2012年リリースのアルバム『Quakers』収録)で。PVもめちゃくちゃ格好良いんですけど、彼のハードコアなラップがヤラれました。

ちなみにGuiltyやMadlibとのタッグでStones Throwから『OJ Simpson』を2010年にリリースするのだが、このアルバムにはFrankが「Scratch Warning」という曲でゲスト参加しており、「おまの」への曲が二人の初共演曲と思われる。

敬愛するプロデューサー「J Dilla」からの流れでFrankやGuiltyと同じ二人のラッパーを知り、純粋にファンでもあったと云うDJ MITSU THE BEATS。実は今回の共演以前にも彼らとは少なからず関わりがあったと云う。

DJ MITSU THE BEATS: 2000年代後半だと思っています。LAへ行った時にGuiltyと曲を作れるという話を聞いて。ちなみにGuiltyのアルバムが出たりして、盛り上がりつつあったタイミングだったので、僕自身は個人的にやっていたんですけど、僕が全てのインシニアチフを取っていたわけじゃなかったんで、その時は表現はしなくて。

一方でFrankに関しては、プロデューサーとしてすでに楽曲での共演を果たしている。

DJ MITSU THE BEATS: 多分、彼らが日本のヒップホップカーとやりたいみたいな話で僕に声がかかったと思っただけです。それでトラックを提供して出来たのが、2019年にリリースされたFrank N Dankのアルバム『St. Louis』に入っている「St. Louis (The Block)」なんです。それがFrankの最初のアルバム。

DJ MITSU THE BEATSが手がけた曲がアルバムタイトル曲になったという事は、それだけ彼らがDJ MITSU THE BEATSのジョイントを気に入ったという事の証でもあるのだ。この時に出来た両者のコネクションが、今回のコラボレーションにも繋がっている。

DJ MITSU THE BEATS: インスタか何かでFrankやGuiltyが二人と一緒に曲作りをしているのを見て「Jの二人が今も繋がっているならば、一緒に(曲作りを)出来るかな?」って思った。それでFrankや、それらのFrank経由でGuiltyにもお願いをしてみました。

「M.O.V.E.」を一聴して思うのは、この3人がある意味、J Dillaという人物がきっかけで繋がったのにも関わらず、曲の質感はそれとは異なるタイプであるという点だ。

DJ MITSU THE BEATS: 90年代ラップホップのラッパーがあるの、逆にJ Dillaの曲を出しちゃった2000年感が出ちゃった感じが。J Dillaのぼんやりとした感じが、90年代ヒップホップという縛りがあるのと、逆に自分が出て良かったなと思います。

サンプリングで作られながら、躍動するライヴ感のあるビートはこの曲の大きな魅力だろう。

DJ MITSU THE BEATS: 90年代のテイストを出したいという理由で、ピアノを使ったジャジーなものにしようって考えて。ただ、ジャジーと言っても柔らかい感じではなくて、もっと尖ったテイストのジャズのイメージ。そういうビートが二人のラップとも合っただろうなと思って。ただ、ピアノの跳ね方とかドラムの感じとかもそうですけど、90年代のものではないので、現在のヒップホップとも融合するものになりました。こういうトラックを最近はおまのやっていたものであって、逆に90年代に自分が作っていたビートにも通ずるものがあるですね。

1バース目がFrankのバース目をGuiltyがラップし、「M.O.V.E.」というタイトルがキーとなって、二人はフリースタイル的にライム乗せながら、スピーディーかつスリリングに突き進んでいく。DJ MITSU THE BEATS: 最初、Frankのラップから始まるんですけどもバッチリだと思って思いましたね。Guiltyのラップも格好良く仕上がって。

ちなみにDJ MITSU THE BEATSは、この二人のラップに「デトロイト」の空気を強く感じている。DJ MITSU THE BEATS: すごく部分が違って、これは説明できないんですけど、この二人からはめちゃくちゃデトロイトを感じますね。それは彼らの曲を昔から何度も聴いていて、僕の中で勝手に刷り込まれているイメージなのかもしれないですけど。昔、一度だけデトロイトに行った時に、あるパーティーでDJをやった。その頃、デトロイトは自動車産業が完全に落ち込んで、街自体が廃墟みたいになっている時で。ビルの何階かでDJをしたんですけど、薄暗い中でお客さんも20人ぐらいしかいなくて。ビルの窓から外を見ても、誰も歩いてない。そんな中で、かかっている曲はめちゃくちゃ格好良い。そこで受けた影響がすごく大きくて、その時の記憶は今も抜けていない。それが僕の思うデトロイトのイメージですね。

仙台とデトロイトという二つの街が繋がって生まれた今回の「M.O.V.E.」。彼らが東京やNY、LAといった都市の出身ではないからこそ、そのグルーブがこの曲の中には宿っているようにも思う。また、この曲をきっかけに、DJ MITSU THE BEATSが彼ら二人、あるいはさらに他のアーティストも交えて、国境を超えたコラボレーションを展開していくことを期待したい。

文 大前 至(音楽ライター)

